

唐初期の唯識学派と仏性論争

吉 村 誠

序 言

唐初期の仏性論争は、玄奘（602-664）が新訳論書において五姓各別説を紹介したことに始まる。『仏地経論』や『成唯識論』によれば、種姓には五つの差別があり、その一部は成仏できないという（五姓各別＝一分不成仏）。この五姓各別説を受け入れて、新来の唯識説を研究した人々を、唯識学派と称することにする¹。

しかし、唐初期の仏教徒の中には、五姓各別説が『涅槃経』の悉有仏性説や『法華経』の一乗説と相容れないとみる人も多かった。衆生に悉く仏性がある以上、全ての衆生が成仏できるはずである（悉有仏性＝一切皆成仏）。そのように考える人々は、五姓各別説を受け入れず、唯識学派を強く非難したのである。

この論争には二つの系統がある。第一は、靈潤と神泰の論争である²。その概要は最澄の『法華秀句』巻中によって知ることができる。第二は、法宝と慧沼の論争である。その詳細は両者の著作に明らかである。議論の内容は多岐にわたるが、本稿では論争の経緯をたどりながら、主な争点と学説とを検証することにした³。

なお、論争の経緯をあらかじめ整理すれば、次のようである（五は五姓各別論者、一は一切皆成論者を示す。書名の後の数字はその著述年代を示す⁴）。

648 年 玄奘『瑜伽師地論』訳出

649 年 玄奘『仏地経論』訳出

一 靈潤「一卷章」（『法華秀句』所収、650 年頃）

五 神泰「一卷章」（『法華秀句』所収）

一 義栄「一卷章」（『法華秀句』所収）

659年 玄奘『成唯識論』訳出

663年 玄奘『大般若経』訳出

664年 玄奘没（602-）

㊦ 基『成唯識論掌中樞要』『妙法蓮華経玄賛』『大乘法苑義林章』
（-682年）

㊦ 円測『解深密経疏』（648-688年）

682年 基没（632-）

696年 円測没（613-）

㊦ 法宝『一乘仏性究竟論』（695-699年頃）

㊦ 慧沼『能顕中辺慧日論』（-714年）

㊦ 法蔵『華嚴五教章』（683年頃）『華嚴経探玄記』（695-712年頃）

一、『仏地経論』の五姓各別説

玄奘は貞観十九年（645）から永徽元年（650）にかけて、『瑜伽論』『摂大乘論』『仏地経論』等の唯識論書を集中的に翻訳した⁵。そのうち貞観二十三年（649）に訳出された『仏地経論』には、五姓格別を定義する次のような記述がある⁶。

衆生には無始以来、五つの種姓がある。そのうち①声聞種性、②独覚種性、③如来種性（菩薩種姓）、④不定種性（声聞・独覚から菩薩に趣く種姓）は、時期に遅速はあるが、諸仏の慈悲方便によって将来必ず成仏する。しかし、⑤無性有情（仏性の無い有情）は、出世功德の因を欠いているため、決して成仏することがない。たとえ諸仏の導きによって善因を修め、善趣に生まれることがあったとしても、決して輪廻を離れることができず、必ず悪趣に退転する。諸仏がまた方便で救済しても、また悪趣に退転する。これが未来の尽きるまで延々と繰り返され、諸仏はついに彼を成仏させることができない、という（図1）。

この無性有情についての説明は、『涅槃経』の悉有仏性説や『法華経』の一乗説と明らかに矛盾しているようにみえる。この問題について、『仏地経論』は二つの解釈を示している。第一は、悉有仏性や一乗の教えは「真如法身仏性」について説かれた方便であるという解釈。第二は、それらの教えは「少分の一切」に対して説かれた方便であるという解釈である。

第一の「真如法身仏性」とは、無性有情を含む一切の衆生にある仏性のこと

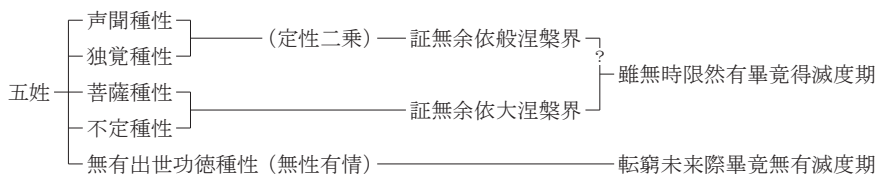
である。これはいわば原理としての仏性であり、これがあるからといって必ずしも成仏できるわけではない。『涅槃経』の悉有仏性とは、この原理としての仏性を説いているにすぎない、という解釈である。これは理行二仏性説の有力な根拠とされている。理行二仏性説とは、仏性を理性（理仏性）と行性（行仏性）の二つに分け、行性の有無によって種姓差別があるとする、唯識学派の仏性説である⁷。

第二の「少分の一切」とは、その場にいる全ての衆生という意味である。たとえば、唯識では『法華経』の一乗説を、主に不定種姓に向けられた方便の教えであるとみる。そうすると、『法華経』の中で仏が一切と言うときは、その場にいる不定種姓に対して一切と言っているにすぎない、ということになる。唯識学派ではこれを少分の一切、または一分の一切というのである。これは『法華経』や『涅槃経』の聴衆を限定し、それらの教えを方便とするための解釈である。

このように、『仏地経論』には五姓各別説のみならず、悉有仏性説や一乗説との矛盾に対処するための解釈までが説かれていた。『仏地経論』の訳出は、唯識学派にとって極めて重要な意味があったといえるだろう。

また『仏地経論』巻五は、声聞・独覚には、定性二乗（決定種姓）と不定種姓との二つがあると説いている⁸。定性の声聞・独覚は、無余涅槃に入り寂滅に住する（灰身滅智する）ため、有為無漏の功德がなく、衆生を利益する働きもない。これに対し、不定種姓の声聞・独覚は、無余涅槃に入らず、誓願の力によって大乘に転じ、修行を経て菩提・仏身を証得すると、有為無漏の功德によって衆生を利益する、という。このことから、唯識学派では定性二乗も成仏することができないとみなされたのである。

図1、『仏地経論』の五姓各別説



※『仏地経論』巻二では声聞・独覚はいずれは成仏するとされているが、巻五では定性の声聞・独覚（定性二乗）は成仏しないとされている。両者の関係については十分に説明されていない。

二、靈潤と神泰の論争

1、靈潤の批判

唯識学派の五姓各別説に批判の声をあげたのは、玄奘の翻経院で証義を務めていた靈潤（-650-）である。隋末唐初の長安では『撰大乘論』と『涅槃經』が流行していたが、靈潤は生涯に『撰大乘論』三十余遍、『涅槃經』七十余遍を講じた、当時を代表する人物であった。『法華秀句』によると、靈潤は新来の唯識説を十四の点にわたって非難したという。その第一は、衆生界に無仏性の衆生がいるという説に対するものであり、第二は声聞・独覚から無余涅槃に入ると大乘に転ずることがないという説に対するものである。ここでは第一の批判についてみることにしたい⁹。

靈潤は、衆生界に無仏性の衆生がいるという説は、凡夫・小乗の未了義の教えあり、衆生を利益することのない魔説であると非難する。また、その反証として、『涅槃經』の悉有仏性説、『無上依經』の如来界が煩惱に隠蔽されたものが衆生界であるという説、『宝性論』の十仏性の中の遍満性等をあげている。靈潤は、衆生界は如来界に等しく、仏性は一切衆生に遍満している、と考えていたのであろう。これは法界ないし如来蔵思想による仏性の解釈である。

また靈潤は、一切衆生悉有仏性とは了義の教えであり、全分の一切に対して説かれた教えであるという。これは唯識学派の少分一切説に対する批判である。また、理行二仏性説には二つの過失があるという。第一は自論に違ふ。これは、唯識経論にその証拠がないという批判である。第二は諸々の経論に違ふ。これは、その他の経論にも理性があつて行性はないとは説かれていないという批判である。靈潤は、理性があれば必ず行性がある、なぜならば理性は如来蔵であり、行性はその働き（業）だからである、と述べている。靈潤は、理行二仏性説を如来蔵思想で読みかえることによって、五姓各別説を批判しているのである¹⁰。

さらに靈潤は、『涅槃經』で一闍提は畢竟無涅槃法といわれているが、畢竟とは無量時のたとえにすぎず、決して仏性がないわけではない、という。また無仏性の衆生を立てる者は、その理由として畢竟障種子の存在をあげているが、この畢竟も無量時のたとえにすぎない、という。畢竟障種子とは、『瑜伽論』卷五十二に説かれる煩惱障と所智障の種子のことである¹¹。初期の唯識学派では、行性の有無のほかにも、畢竟障種子の有無によって種姓差別を説いていた

のである。これに対し、靈潤は畢竟障種子の存在を否定することで、無仏性の衆生を立てる根拠はないと主張しているのである。

2、神泰の反論

唯識学派の神泰（-645-657-）は、「一卷章」を著して靈潤に反論した。神泰も靈潤と同じく玄奘の翻訳院で証義を務めた人物である。著書に『俱舍論疏』『因明論書』『種姓差別集』等がある。ここでは『法華秀句』に引用された「一卷章」の議論をみることにしたい¹²。

神泰は、一分無仏性の説は、釈尊の『涅槃經』『善戒經』や、弥勒の『莊嚴論』『地持論』『瑜伽論』、無着の『顕揚論』にも説かれているため、これを非難するならば諸仏・諸菩薩を非難することになるといい、靈潤を批判する。

また神泰は、『涅槃經』にも五姓各別が説かれているとして、多数の經文を引いてこれを論証する。そして、『涅槃經』に説かれる無性有情は、暫時の無性ではなく、畢竟の無性であると述べている。しかし、本来『涅槃經』には五姓各別は説かれていない。すなわち、神泰の論証とは、厳密に言えば『涅槃經』の本文を五姓各別説によって解釈することにほかならない。このような解釈は唯識学派の常套手段となるが、これはその嚆矢である。

さらに神泰は、『涅槃經』の仏性は有でもなく無でもないという文を引用し、行性は亦有亦無である、大乘の種子は十信以前に現行することはない、と述べている。また、仏性の有無に執着してはならない、新旧の經論に等しく有無が説かれている以上、総じてそれを信じるべきである、とも述べている。また、一切衆生悉有仏性とは如来の随自意の語であり、一分無仏性を説く新訳とも矛盾しない、仏性の説は多義多含であるから一を取って他を捨ててはならない、というのも同じ主旨である。

このような仏性の総合的解釈は、彼の三種仏性説にも反映されている。すなわち、①理性（二空所顯の真如）、②行性（能証の因、本識に依付する大乘種子）、③凡夫の仏性（大乘種子、煩惱を厭い仏果を求めること）の三つである。このうち、①理性は一切衆生に平等に有るが、②行性は有るものと無いものがある。行性は大乘種子と言い換えられているが、種姓差別が大乘種子の有無によるのか、それとも現行の有無によるのかは不明である。

また、③凡夫の仏性も大乘種子とされているが、これは内容からみて大乘種子を生起させる縁のことをいっているようである。具体的には、凡夫が煩惱を

厭い、仏果を求めるようになることである。神泰はこれを凡夫の仏性として別に立てたのである。これによれば、行性は成仏の因であるが、それは煩惱等を縁として起こるということになる。これは理性を因として行性が生じるという、靈潤の解釈に対する批判ともなっている。神泰の三種仏性説は、慧沼に継承されることになる。

三、『成唯識論』の無漏種子説と基の理行二仏性説

1、『成唯識論』の無漏種子説

玄奘は顕慶四年（659）に『成唯識論』を翻訳した。約十年ぶりの唯識経論の翻訳であったが、そこには五姓各別説を解釈するうえで、極めて重要な教義が示されていた。それは無漏種子説である¹³。

無漏種子とは、阿頼耶識の中にあつて成仏の因となる種子である。これには二つある。第一は、本有無漏種子である。衆生に無始の時から具わっている無漏の種子である。これが有為無漏の出世間法を生じるという。したがって、本有無漏種子の有無によって種姓差別があるということになる。第二は、新熏種子である。聞熏習によって新たに生じる種子である。聞熏習には無漏性のものと有漏性のものがあるという。無漏性のものは本有無漏種子に熏習して出世間法の因縁となり、有漏性のものは有漏種子に熏習して増上縁となるのである。

無漏種子説の登場は、仏性論争における諸問題に一つの解答を与えることになった。先ず、成仏の因について、これを無漏種子と規定した。それまでは行仏性や大乘種子とされていたが、それらの解釈は不要となった。また、この規定により、成仏の因を理性とする解釈も否定されたことになる。次に、種姓差別の理由について、これを本有無漏種子の有無によると規定した。それまでは行仏性や畢竟障種子の有無によるとされていたが、ここにより明確な理由が示されたのである。

このように考えると、玄奘の『成唯識論』の翻訳には、五姓各別説をめぐる仏性論争を解決する意図が含まれていたとみてよいであろう。

2、基の理行二仏性説

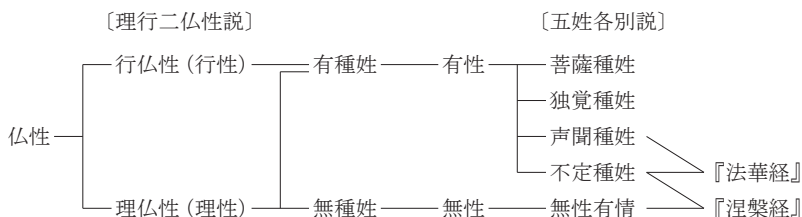
『成唯識論』が翻訳されると、玄奘の高弟である円測（613-696）や基（632-682）は、五姓各別説をさまざまな学説と結びつけ、唯識の教学体系を確立し

ていった¹⁴。ここでは基の理行二仏性説についてみることにしたい¹⁵。

基は『妙法蓮華経玄賛』巻一末で、次のように述べている¹⁶。『法華経』の一乗と『涅槃経』の悉有仏性とは、ともに不定種姓に向けられた教えである。しかし、仏性には理性と行性の二つがある。理性は全ての衆生にあるが、行性はないものもいる。理性を説いて行性を説かないのが、『法華経』や『涅槃経』の一切皆成仏の教えなのである。ところで、『善戒経』や『地持経』には有種性・無種性の二つがあると説かれているが、この差別は行性の有無によって決まるのである。無種性とは、五姓の中の無性有情である。したがって、有種性・無種性でいえば、『法華経』は有種姓のみを対象とし、『涅槃経』は無種姓をも対象とするので、両者には違いがある、という。

基はここで、有種性・無種性を媒介にして、理行二仏性説と五姓各別説とを連絡させている（図2）。唯識経論に典拠のない理行二仏性説も、こうして唯識の教義体系の一部に組み込まれることになった。また基は、『法華経』と『涅槃経』は不定種姓を主な対象とする点では共通するが、前者は有種姓のみを対象とするのに対し、後者は無種姓をも対象とする点で違いがある、と述べている。おそらく基は、理行二仏性説によって『法華経』と『涅槃経』とを切り離し、一切皆成論を解体しようとしたのであろう。

図2、基の理行二仏性説

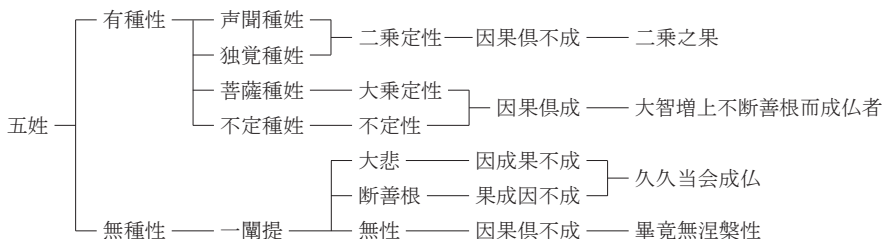


※基によれば、『法華経』は不定種姓と応化声聞を主な対象とし、『涅槃経』は無性有情と不定種姓を主な対象にするという。『大乘法苑義林章』巻一、大正四五、266a。『成唯識論掌中樞要』大正四三、611a。

また基は、『成唯識論掌中樞要』巻上本で、無性有情の不成仏を論証している¹⁷。たとえば基は、無性有情をひとまず一闍提とみなし、それを①一闍底迦 (icchantika)、②阿闍底迦 (acchantika)、③阿顛底迦 (atyantika) の三つに分けている（図3）。すなわち、①生死を願う断善根、②涅槃を願わない大悲、③

畢竟無涅槃性の無性（無種性）の三つである。そして、前の二つは遠い未来には成仏の可能性があり、実は善根を断じているわけではないが、最後の無性だけは絶対に成仏できないと定義する。また、悟りの因果が成就するか否かについて四句分別し、現在・未来において因果ともに成就しないので、無性有情は決して成仏することができない、と述べている。基はこの他にも無性有情について詳細な議論を重ね、その不成仏の論証につとめている。

図3、基の五姓各別説



※一闍提のうち大悲と断善根は、いずれは成仏するとされているので、果からみれば不定種性である。

四、法宝と慧沼の論争

1、法宝の批判

靈潤の姿勢を引き継いだ人物に法宝（627?-705?）がいる。法宝も玄奘の翻訳事業に参加していたが、『大毘婆娑論』の翻訳では玄奘の翻訳に異を唱え、『俱舍論疏』を著して普光の『俱舍論記』を批判するなど、唯識学派に対して否定的な態度をとっていた。元来が熱心な一切皆成論者であり、その著作『一乘仏性究竟論』では新来の唯識説を全面的に批判している¹⁸。

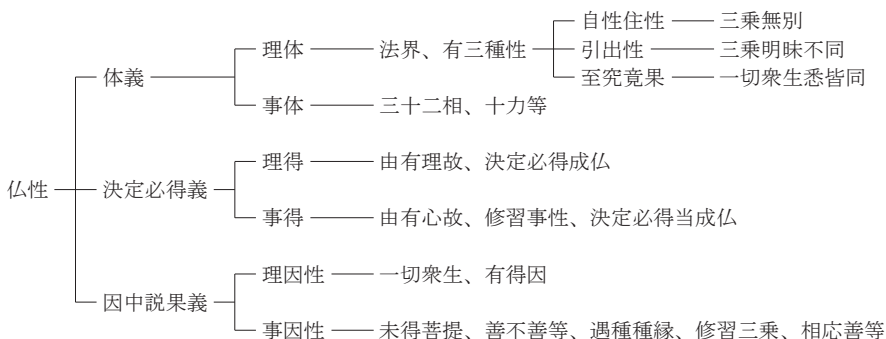
法宝は『究竟論』巻三で、さまざまな経論を引証し、理性・行性は一切衆生にある、定性二乗も必ず成仏する、一闍提は畢竟無性というのが畢竟とは無量時のたとえである、ゆえに一分無性説は不了義の教えである、と述べている。また、無性有情の存在証明に使われる経文を会通して、一闍提が畢竟無性でないことを論証している。これらは全て唯識学派の仏性説に対する批判であり、靈潤の主張と軌を一にするものである。

法宝は『涅槃経』の仏性説を次のように解釈する。『涅槃経』は第一義空（理）

を仏性としながら、有情の心（事）にも仏性があると説いている。その本性は理であるが、心もまた仏性であり、理と心とはともに成仏の正因である。理とは法界・真如・如来蔵であり、心とは第八阿頼耶識である、という¹⁹。法宝は、このような考えに基づいて、仏性を理と事に分ける独自の仏性説を展開した。これには二つの解釈がある。

第一は、仏性に体義・決定必得菩提義・因中説果義の三義があるとして、それぞれを理・事の二つに分ける解釈である（図4）。理としては、法界を体としており、必ず菩提を得るため、一切衆生には応得因があるといえる。事としては、三十二相十力等を体としており、修行すれば必ず菩提を得るが、まだ菩提を得ないうちは三乗相応の善を修めることになる。すなわち、一切衆生には理性と事性が具わっており、事からいえば有性・無性の違いがあるが、理からいえば一切衆生はみな有性である、という解釈である。

図4、法宝の理事二仏性説（一）



第二は、仏性の三義を理・事によって概括し、それぞれを因・果に分ける解釈である（図5）。理についていえば、因は第一義空、果は法身涅槃である。事についていえば、因は正因が衆生、縁因が六波羅蜜、果は阿耨菩提である。これを『涅槃経』の本文に還元したものが、法宝の五種仏性説である²⁰（図6）。すなわち、①理性（第一義空）、②因性（善五陰）、③因因性（無明等）、④果性（阿耨菩提）、⑤果果性（大般涅槃）の五つである。このうち、一闡提には理性・因因性があり、不断善根には理性・因性・因因性があり、仏には理性・果性・果果性があるという。ここでも理性だけは一切衆生に共通するとされている。

図5、法宝の理事二仏性説（二）

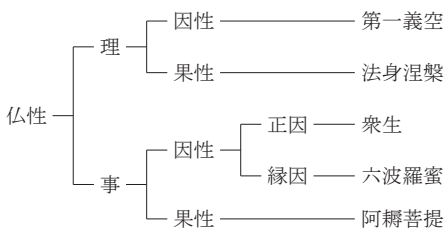
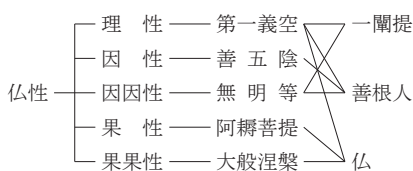


図6、法宝の五種仏性説



法宝は、理性には働き（力能）があるので、理性があれば必ず成仏できるといふ。また、その証拠として『仏性論』の清浄事能、『起信論』の真如熏習、『涅槃経』の仏性因縁力をあげている。これは理性＝如来蔵とみる解釈であり、靈潤のそれと同じである。法宝は仏性を理・心や理・事に二分するが、その本性はあくまでも理性であり、それは法界・真如・如来蔵と同義である、と考えていたのである。

法宝はまた『究竟論』巻四で、『瑜伽論』巻五十二に説かれる真如所縁縁種子を、「真如を対象とする種子」という意味ではなく、「真如から縁生した種子」という意味で解釈している。そして、真如所縁縁種子は一切衆生にある、ゆえに種姓差別は新熏の障種子の有無によっておこる、と述べている²¹。これは、『成唯識論』の無漏種子説に対する批判である。法宝は、『瑜伽論』の真如所縁縁種子説を、真如縁起説で解釈することによって、一切皆成仏を主張したのである。

2、慧沼の反論

慧沼（648-714）は基の高弟である。『成唯識論了義灯』を著して基の学説を宣揚し、円測の解釈を批判した。また、『能顕中辺慧日論』には法宝の仏性説を多数引用し、その一々に厳しい批判を加えている²²。

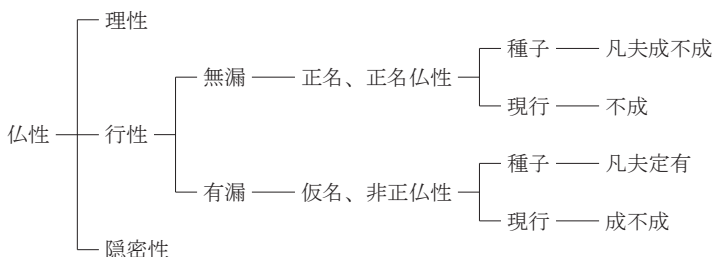
慧沼は、法宝の経論の解釈が誤っていることを論証し、無性有情や定性二乗の不成仏は了義の教えである、理性は偏在するが行性は偏在しない、理（第一義空・法界・真如・如来蔵）や心（第八識）は成仏の正因にはならない、種姓差別は新熏種子によるのではなく法爾種子による、真如所縁縁種子を「真如が縁生した種子」と解釈するのは誤りである、という。慧沼の解釈は、『成唯識論』の教義に忠実である。『成唯識論』では、成仏の因は本有無漏種子であり、

その有無によって五姓各別があるとされている。また、真如に働きがあることや、心が成仏の因となることは認められていないのである。

慧沼はまた、神泰の説を継承し、新たな三種仏性説を唱えている（図7）。すなわち、①理性（二空所顕真如）、②行性（有漏無漏万善万行）、③隠密性（無明等）の三つである。このうち、行性について慧沼独自の解釈がみられる。慧沼は、行性を有漏・無漏の二つに分け、無漏性のものを正の仏性、有漏性のものを仮の仏性という。また無漏・有漏には、それぞれ種子・現行がある。凡夫の場合、有漏の種子は必ずあるが、現行はするものとならないものがある。これに対し、無漏の種子はあるものとならないものがあり、現行はすることがない。このうち、無漏の種子がないものが無性有情である。このように、慧沼は行性に種子説を結びつけることで、一分不成仏を主張したのである。

さらに慧沼は、一闍提を一闍底迦・阿闍底迦・阿顛底迦の三つに分け、無性有情の存在を証明している。これは基の三種闍提説を継承するものである。

図7、慧沼の三種仏性説



結 語

以上、唯識学派の五姓各別説をめぐる唐初期の仏性論争について概観した。

『仏地経論』に説かれる五姓各別＝一分不成仏説は、当時の中国で流行した悉有仏性＝一切皆成仏説と相容れないものであった。そこで、唯識学派では少分一切説や理行二仏性説を唱え、『涅槃経』の悉有仏性説や『法華経』の一乗説を会通しようと試みた。しかし、靈潤はこれを痛烈に批判し、如来蔵思想に基づいた理行二仏性説を提示した。神泰はこれに反論し、三種仏性説や大乘種子説を創案したのである。

『成唯識論』の無漏種子説の登場は、この問題に一つの解答を与えることに

なった。この学説によって、成仏の因は本有無漏種子にあり、その有無が種姓差別を決める、と規定されたからである。これをうけて唯識学派では、円測や基を中心に教義の体系化が進められた。しかし、法宝はこれに徹底して抵抗し、如来蔵思想に基づいた理事二仏性説を提示した。慧沼はこれに反論し、新たな三種仏性説を提案したのである。

論争の間、唯識学派とその批判者は、互いの論拠を巧みに読みかえ、相手の学説を換骨奪胎して、自家の主張に取り込み、新説を次々に提唱した。また論争を通じて、両者の学説もしだいに発展し、宗旨もますます明確なものとなった。最大の争点である成仏の因についていえば、唯識学派はこれを行性ないし無漏種子に求め、批判者はこれを理性ないし如来蔵に求めるようになった。その結果、唯識学派が真如縁起説を否定し、その批判者が無漏種子説を拒絶するに至り、両者の議論は交点を失い、平行線に陥ったのである。以後論争が下火となった理由は、ここにあるといえるだろう。

ところで、靈潤や法宝は、仏性を如来蔵思想や真如縁起説で解釈したが、如来蔵の教義体系を作ることにはついにできなかった。それを完成させたのは法蔵(643-712)である。法蔵は華嚴の五教判にもとづく五種仏性説を唱えたが²³、その議論には靈潤や法宝の学説が取り入れられている。ここに至り、五姓各別説をめぐる仏性論争は一つの終結をみたのである。

参考文献

浅田正博 Asada, Masahiro

[1986]-1 「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」『龍谷大学論集』429.

[1986]-2 「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・巻第五の両巻について」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』25.

富貴原章信 Fukihara, Shōshin

[1966] 「慧日論の仏性説」『大谷学報』46-2.

[1973]-1 「靈潤神泰の仏性論争について」『同朋仏教』5.

[1973]-2 「初唐法宝の仏性説について」『仏教学セミナー』18.

袴谷憲昭 Hakamaya, Noriaki

[1981] 「仏教史の中の玄奘」『人物中国の仏教 玄奘』大蔵出版 所収.

橘川智昭 KitsuKawa, Tomoaki

- [1999] 「円測による五性各別説の肯定について—円測思想に対する皆成的解釈の再検討—」『仏教学』40.

松本史朗 Matsumoto, Shirō

- [2004] 『仏教思想論 上』大蔵出版.

蓑輪顕量 Minowa, Kenryō

- [1991] 「真如所縁縁種子と法爾無漏種子」『仏教学』30.

根無一力 Nemu, Ichiriki

- [1986] 「一乗仏性究竟論の撰述と時代的背景」『叡山学院研究紀要』9.
 [1987] 「慧沼の研究—伝記・著作をめぐる諸問題—」『〔龍谷大学〕仏教学研究』43.

末木文美士 Sueki, Fumihiko

- [1990] 「法宝の真如論一端」『如来蔵と大乘起信論』春秋社 所収.

田村晃祐 Tamura, Kōyū

- [1980] 「最澄『法華秀句』中巻について」『東洋大学文学部紀要 東洋学論叢』33.

常盤大定 Tokiwa, Daijō

- [1930] 『仏性の研究』東京丙午出版社 : rpt. 国書刊行会.

山部能宜 Yamabe, Nobuyoshi

- [1990] 「真如所縁縁種子について」『北畠典生教授還暦記念 日本の仏教と文化』所収.

吉村 誠 Yoshimura, Makoto

- [1999] 「玄奘の大乗観と三転法輪説」『東洋の思想と宗教』16.
 [2002] 「唯識学派の理行二仏性説について—その由来を中心に—」『東洋の思想と宗教』19.
 [2003]-1 「中国唯識諸学派の展開」『東方学の新視点』五曜書房 所収.
 [2003]-2 「撰論学派の心識説について」『駒澤大学仏教学部論集』34.
 [2004]-1 「唯識学派の五姓各別説について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』62.
 [2004]-2 「中国唯識諸学派の称呼について」『東アジア仏教研究』2.
 [2006] 「唯識学派における種子説の解釈について—真如所縁縁種子から無漏種子へ—」『印度学仏教学研究』55-1.

[2007] 「真諦の阿摩羅識説と撰論学派の九識説」『印度学仏教学研究』
56-1.

註

略号 大正 = 『大正新脩大藏經』

卍統藏 = 『卍大日本統藏經』

伝全 = 『伝教大師全集』

- 1 唯識学派の五姓各別説については、吉村 [2004]-1 参照。また唯識学派という称呼については、吉村 [2004]-2 参照。
- 2 後に新羅の義栄が神泰を批判したが、その検証は省略する。
- 3 唐初期の仏性論争については、常盤 [1930] pp.220-308、富貴原 [1966]、[1973]-1、[1973]-2、田村 [1980]、根無 [1986]、吉村 [2003]-1 参照。
- 4 『解深密経疏』等の著述年代については、根無 [1986]、[1987] 参照。『掌中枢要』の成立は、その中に『成唯識論』（659 年訳出）や『大般若経』（663 年訳出）が引用されていることから、玄奘の没した 664 年を成立の上限とし、基の没した 682 年を下限とする。
- 5 玄奘の翻訳については、袴谷 [1981] pp.243-289、吉村 [1999] 参照。
- 6 以下、『仏地経論』巻二、大正 26、298a。
- 7 唯識学派の理行二仏性説については、吉村 [2002] 参照。
- 8 以下、『仏地経論』巻五、大正 26、312b-c。
- 9 以下、『法華秀句』巻中、伝全 3、154-172 取意。
- 10 靈潤は仏性を不善・善・無記・仏果に四分して解釈したとも伝えられる。『法華秀句』伝全 3、193-194。これは仏性が善悪浄穢に展開するという解釈であり、如来蔵思想に基づくものである。靈潤の如来蔵思想による仏性の解釈は、隋末唐初の撰論学派の心識説に由来する。撰論学派では、第八阿頼耶識や第九阿摩羅識を、仏性・如来蔵・真如等に比定するなど、唯識説を如来蔵思想で解釈することが流行した。唯識学派ではこのような解釈を否定したため、旧説の信奉者から批判を受けることになったのである。撰論学派の思想については、吉村 [2003]-2、[2003]-3、[2007] 参照。
- 11 『瑜伽論』巻五十二、大正 30、589a-b。
- 12 以下、『法華秀句』巻中、伝全 3、172-187 取意。

- 13 以下、『成唯識論』卷二、大正 31、8a-9a。『成唯識論』の無漏種子説については、吉村 [2006] 参照。
- 14 円測が新来の唯識説を信奉し、五姓各別を主張していたことについては、橘川 [1999]、吉村 [2004]-1 参照。
- 15 円測や基の著作には、理行二仏性説への言及が少ない。これは唯識学派の関心が、仏性説から種子説に移行したことを示している。
- 16 以下、『妙法蓮華経玄賛』卷一末、大正 34、656a-b。
- 17 以下、『成唯識論掌中樞要』卷上本、大正 43、610c-611a。
- 18 以下、『一乗仏性究竟論』卷三、卍統 1-95、374b-377b 取意。『一乗仏性究竟論』は卷三のみ続蔵所収。卷一・二・四・五は平安時代写本が現存し、浅田 [1986]-1、[1986]-2 に翻刻されている。また、源信の『一乗要決』卷下には、法宝の仏性説が引用されている。なお、法宝の『一乗仏性究竟論』が円測の『解深密経疏』を参照して作られていることについては、根無 [1986] 参照。
- 19 『一乗要決』卷下、大正 74、366b-c。
- 20 『一乗要決』卷下、大正 74、366a。
- 21 『一乗仏性究竟論』卷四の本文については、浅田 [1986]-2 参照。『瑜伽論』卷五十二、大正 30、589a-b。法宝の真如所縁縁種子については、末木 [1990]、山辺 [1990]、簗輪 [1991]、松本 [2004] pp.119-158、吉村 [2006] 参照。
- 22 以下、『能顕中辺慧日論』大正 45、409a-449c 取意。慧沼の伝記と著作については、根無 [1987] 参照。
- 23 『華嚴経探玄記』卷一、大正 35、116c-117c。

[付記] 本稿は 2008 年 10 月 25～26 日に北京・中国人民大学で開催された第三回中日仏学会議における発表原稿を一部訂正したものである。